

編集後記

ディオパン問題については、近く本誌にまとめる予定なので、ここでは最近頻発している食品の偽装表示の問題について取り上げたい。類似なインチキが同時に目立つようになったのは、共時性現象と言ってもよいだろう。

最初に報じられたのは、阪急阪神ホテルズでメニューと実際に提供された食品の内容が違っていったことだった。メニューに手捏ねハンバーグとあったのに、実際には既製品が提供されていたし、フレッシュオレンジジュースと称して解凍されたパック詰めジュースがお客様に提供されていた。これはすぐに系列の高級ホテル「ザ・リッツ・カールトン大阪」に飛び火した。ここなら高級なものが食べられ、ブルジョア感覚が満たされることを期待したお客様が、目の玉が飛び出るほどのお値段でもかえって喜んで注文していたのである。だが、ふだん近所のコンビニで買う食材と同じだったら、まるで詐欺に遭ったようなものになってしまう。ところでその数日後、三越伊勢丹や高島屋など東京の高級デパートでも、そのほとんどがそろってニセモノ食品を提供していたことが分かった。

これはもはや会社の取締役社長がお詫びの最敬礼をすまじう問題ではないだろう。わが国特有の文化的現象であると思ってしまった。元来、自分の食べるものは、素材の顔を見て選ぶのが本当だと思う。ブランドに頼った人任せの食事をしていて、いつの間にかこんなに消費者をバカにした、心貧しいものばかり食べさせられてしまう。日本が最長寿国であると威張れなくなる日も近いことのように思うのである。

培ってきた信用と心のつながりによって、長く正直な商売を続けることを志すより、まずコストカットによって当期利益を上げることだけが至上命令になった企業状況があるだろう。原発の場合も同じことである。まれにしか起こらない事故を想定外として設備投資をカットすることに有能であったため、東京電力の清水正孝氏は社長になった人だった。しかしこの度の震災では関西に遊びに行っていたため、総指揮をとることが出来なかった。顔をみせないことが大いに指弾されたが、心身症のために入院していたらしいのである。

またこの度の26号台風のときの大島町の川島理史（まさふみ）町長は、隠岐の島に出張中だったが、接待の二次会で女性がいるクラブで大酒を飲んで連絡が取れず、避難指示を出せなかった。真夜中に避難するよう指示しても、かえって被害を大きくするだけという言い訳も成立するが、トップが不在で、大事故の後の対処の仕方に右往左往したのは醜態だった。平時に大事故に対する備えをしていなかったことが被害を大きくしたことは確かだろう。これらの人たちはリーダーとしては失格なのだろうが、日本では、無能だけれど皆の雰囲気を壊さないKY人間がリーダーに選ばれることが多い。かくして誰が責任者で、いつ決断を下すべきだったかは、つねにアイマイになってしまう。

ディオパンの臨床試験でも、本来筆頭著者がすべての責任を負うべきである。教授連中は、解析についてよく知らないと申し開きをしているが、誰が操作をしたとしても不正論文の最終責任は著者が負うべきである。一方、Novartis社がデータ操作をしてその結果を利用して宣伝したのなら明らかな薬事法違反である。そもそもわれわれのグループは、製薬会社だけに臨床の解析を任せておけば、結果の集積や解析にバイアスを生じかねないことを防ぐために結成され、今まで活動してきたものである。われわれの根本方針を要約すれば、生データを出来るだけ生かすこと、無効データの発表を義務付けることなどであり、今までそのような行動を貫いてきた。例えばダブルコントローラー・システムなどは、現在ほとんど廃れてしまったが、これは自分でもインチキが出来ないような条件を制度として組み込むことを意味している。

最近、臨床試験のやり方が枝葉末節にはしり、煩瑣な書類手続きをこなすことを強制している風潮があり、そのため、いかに生データの尊重が大切であるかが忘れられてしまっているようだ。Lancetのような有名国際誌が歪曲されたデータを含む論文でも掲載するのは、別刷の印刷費用によって稼ごうとしているのだとも指摘されている。これは格付け機関のインチキ格付けによって大きな金融不祥事が起こった事件に匹敵する。アングロサクソンだったら、その慎重さを信用できたものだったが、今や「ブルーオスお前もか」の感を否めない。時代がそう流れているせいなのだろうか。

(栗原雅直・編集長)